

訪問教育における自立活動の指導

— 指導目標の精選と検証 —

○渡邊眞凡 一木 薫

(福岡県立太宰府特別支援学校) (福岡教育大学)

KEY WORDS: 訪問教育 自立活動の指導 指導目標の精選

I 目的

訪問教育においては、授業時数の制約がある中、子どもの確かな学びを保障するために、指導目標の精選が重要不可欠となる。本研究では、自立活動の指導における子どもの変容に基づき、指導の成果及び課題を考察するとともに、設定した指導目標について検証することを目的とした。

II 方法

1.対象児の実態及び教育課程

自立活動を主とした教育課程(訪問教育)で学ぶ小学部2年生の男児。人工呼吸器を使用している。対象児の教育課程をFig.1に示した。1年次の授業時数は週1回(60分)であったが、2年次より週2回(60分)に増加した。

生活	国語	算数	音楽	図工	体育	道徳	特活	自活
0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.4	0.4	2

Fig.1 対象児の教育課程 (数字は単位数を示す)

2.自立活動の目標設定の手続き

以下の手続きで、指導目標を設定した。

- (1)実態把握: 自立活動の内容の6区分に沿った実態把握及び保護者への聞き取りを行った。
- (2)課題の精選①: 実態の中から、課題になるものと課題にはならないもの(機能的な問題から課題にはならないものや、教師の関わり方の工夫により対処すべきもの等)に分類した。
- (3)課題の精選②: 課題として挙げられたものの中から、今までの学習の履歴を踏まえ、1年間(週2回)の指導を通して達成が期待できるかどうかを考慮し精選を行った。
- (4)課題関連図の作成: 挙げられた課題のそれぞれの関連を検討し、中心となる課題を導いた。

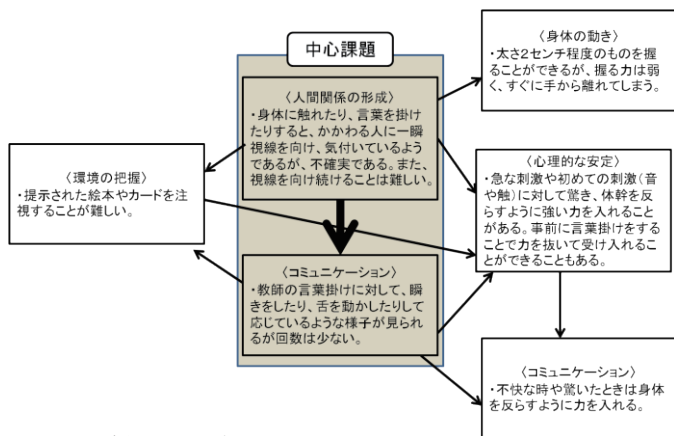


Fig.2 対象児の課題関連図

課題関連図(Fig.2)から、「かかわる人に視線を向け続けることが難しい」ことが「教師の言葉掛けに対して瞬きをしたり、舌を動かして応じたりするが回数が少ない」ことに影響しており、また、これらの課題が、その他の様々な課題の要因になっているのではないかと考えた。そこで、この2つを中心課題とし、指導目標を「言葉掛けに対して、視線を向け、応じることができる」とした。

III 結果

実際の指導場面においては、対象児の行動を細かく言語化してフィードバックしたり、目標の達成状況に応じて段階的にフィードバックを行ったりした。

具体的には第一段階として、対象児が教師に気付き、自ら視線を向けたり、教師の言葉掛けに対して瞬きをして応じたりする行動が見られた場合に称賛した。すると1学期の中頃から、学習時に舌を動かして応じるような行動が授業時に数回見られるようになった。そこで、より明確な手段の獲得を目指し、第二段階では、教師の言葉掛けに対して舌を動かして応じる行動に焦点を当て、称賛するようにした。学習活動の中での言葉掛けを統一し、対象児の応答を待つ時間を十分に確保するとともに、対象児が応じる場面を多く設定するようにした。第三段階では、舌を動かして、より確実に言葉掛けに応じることができるよう、対象児の意思の確認を重ねて行うようにした。対象児が舌を動かして応じた後、「○○でいい？」等と再確認するようにした。そのことで、対象児も自分の気持ちが伝わっていることを実感し、より意欲的に応じる姿が見られた。1年間の指導を経て、教師の言葉掛けに対して対象児が舌を動かして応じる機会が増加した(Fig.3)。

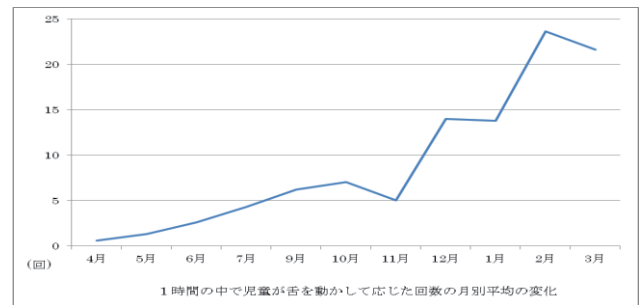


Fig.3 1時間の中で対象児が舌を動かして応じた回数の月別平均の変化

IV 考察

対象児の1年間の変容から、段階的且つ細かなフィードバックや一貫した言葉掛けが有効であったと考える。対象児は、応じる力の高まりとともに、視線を向け続ける力にも向上が見られた。授業開始時は、教師に対して、一瞬視線を向けるのみであったが、授業を重ねるにつれて、20秒から30秒程度、教師に視線を向け続けることができるようになり、他者への関心の向上も見られた。加えて、人のみではなく、提示物に対して注視をすることが増え、注意の持続の力も高まった。また、家庭生活においても変化が見られた。授業時の様子を保護者に細かく報告するだけでなく、教師の言葉掛けや対象児の応じる様子を実際に見てもらうことにより、保護者も家庭生活において対象児が舌を動かして応じた際には称賛をされるようになった。その結果、家族の言葉掛けに対して舌を動かして応じるようになった。課題関連図の作成を通して、教師が保護者に指導の意図を明確に伝えることができるようになった点の変容に繋がったと考える。

さらに、事前に言葉掛けをすることで、触れると必ず力が入っていた背中への触刺激を強い力を入れずに受け入れることができる、握りやすい太さの物を握らせると握る、手から物が離れそうになると手に力を入れて握り直す等、自分の身体に意識を向けることができるようになってきた。まだ十分な定着には至っていないが、中心課題の変容が周辺課題の改善をもたらしていることから、今回、精選し設定した指導目標は適切であったと考える。(WATANABE Maho, ICHIKI Kaoru)